

■研究・実践の課題（テーマ）

食品成分表示におけるアレルギーや宗教戒律などユニヴァーサルデザインの配慮を踏まえた誰にでも理解できる国際ピクトグラムの研究

■主任研究者 川原啓嗣

■共同研究者 黄ロビン、尹成濟、西野圭一郎、中藤寛子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

目的：

2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックまでに訪日外国人観光客数を年間 4000 万人に増やす政府目標が掲げられており、競技施設だけでなく周辺の駅や道路環境をユニヴァーサルデザインの考えで整備すると安倍首相も明言しているが、駅コンコースにおける誘導サインの見直しや多言語表示などの方針が出されているものの、観光客が滞在する宿泊施設やレストラン等飲食店における受け入れ体制はまだ未整備である。

本研究では「食のユニヴァーサルデザイン」からのアプローチとして、食事を提供するホテルや旅館、そして街中のレストランや居酒屋での、言語の異なる様々な外国人とのコミュニケーションにおいて有効なピクトグラム（絵文字）の研究開発と国内外の関係機関の協力で行うアンケート調査（ネット調査）による検証を通して、空港や駅に設置された観光案内所やインターネットのホテル・レストランガイドラインでも活用され、飲食店の看板やメニューにも利用できるピクトグラムの国際モデルを提案することが目的であり、その結果として外国人だけでなく障害者や高齢者を含め広く一般の市民にも喜ばれる生活環境づくりに貢献できれば幸いである。

方法：

2016 年度は書籍、インターネット検索による先行研究と先行事例の調査を実施した。

消費者庁によるアレルギー表示規定、宗教・自身の主義による食に対する禁止事項の調査から、食の安全や文化と食の関係についてまとめた。さらに、在留外国人数、外国人旅行者の増加数と国の傾向を調査し、日本語が理解できない人々や、あるいは日本語が理解できる人々にとっても理解しやすい食品表示としてのピクトグラムの整備の必要性について論じた。

また、1964 年の東京オリンピックにおいて情報伝達方法のひとつとして高く評価されたピクトグラムの事例をもとに、ピクトグラムの性質について考察した。先行事例として FOODPICT（特定非営利法人インターナショナルの取り組み）、EAT TOKYO（東京都の取り組み）について調査を実施した。

考察や提案：

食品表示のピクトグラムデザインで心がける点として 3 点を考察した。1 点目は、食品に対

する知識を持つこと、2点目はピクトグラムが使用される場、物、人についての調査・分析を行うこと、3点目は図形と認知の関係性を意識することである。